



御坊東ロータリークラブ

Club Weekly Britain

since 1996.2.14



四つのテスト(Four way Test)

- (1) 真実かどうか
- (2) みんなに公平か
- (3) 好意と友情を深めるか
- (4) みんなのためになるかどうか

例会 水曜日18時30分 御坊御坊商工会館3F
 事務局 〒644-0002 和歌山県御坊市齒350-28(御坊商工会館3F)
 連絡先 TEL 0738-23-2334 FAX 0738-22-1234
 E-Mail gobo-c@gobo-rc.jp

会長 小池佳史
 副会長 白井勇一
 幹事 栗林久一

念碑を訪問しました。

職場見学 近畿大学水産養殖種苗センター



会長挨拶

会長 小池佳史 君

串本の大島の港に午前10時30分に着き、近畿大学水産養殖種苗センター多さ今事業場の事業長岡田貴彦氏の案内により、30人乗の漁船でマグロの生簀へ案内して頂き、マグロに餌をやりながら説明して頂きました。

世界でトップの技術と実績のある現場を見せて頂きました。大きなマグロはイルカぐらいの大きさがあり、200~300kgの重量があるらしいです。



その後、大島にあるエルトゥールル号遭難事件のトルコ



マグロについて

マグロは、一度に約3,000万個の卵を産むそうです。自然界ではその中から成魚に育つのは1匹あるかないかの確立で、それを近大養殖センターでは約0.03% (90,000匹)位の確率で成魚になるそうです。

串本センターでは産卵用のマグロは約7歳で体重は200kg 体長は2m位で、泳いでいる姿は、ほとんどサメのようです。出荷用のマグロは約80kg程度で3歳位だそうです。

産卵チームの生簀に餌を投げ入れると、バシヤバシヤ!!と、すぐに食べてしまいますが、出荷用の生簀は餌を投げ入れても初めは食べません、マグロは分かっているのです。

釣り上げられて出荷されるかも？警戒しながらも最後は食べてしまいますが、少し驚きです。

マグロにも知能があったのか？(本能かな?) マグロの寿命は近大では、過去に24歳まで生きたものがいたそうです。(体長は3.5m位)生物学的に、病気になるないマグロは40年(歳)位は生きるそうです。

生簀の中で死ぬのは網にぶつかって死ぬか、網を突き破って逃げるかのどちらかだと言う事です。(骨が軟らかいので、網にぶつかるとすぐに死んでしまう。)

あとは、潮の岬での近大マグロの刺身は正直、美味しくなかった。やはり、脂っこいと言うか・・・人間で言うと肥満、鳥で言うとブロイラー？やはり大海を泳いでいるのと生簀の中にいるのと雲泥の差があると思われます。

(赤みが中トロくらいやわらかく脂っこい)

— 細川幸三 君 著 —

学問の垣根をこえて 広がる水産研究の未来

養殖業発展の礎となる多くの業績を挙げた当研究所。野生の海水魚を飼い馴らして養殖種に改良し、産卵網魚の養成に成功したことも大きな成果の一つです。その背景には生産のための実践的研究が行われ、養殖技術の向上に努めたことにあります。近年では、魚類栄養学、育種学、形態学、生理・生化学、魚病学などの基礎学問にも重点を置き、養殖学へのより幅広い応用を試みてきました。本産研究所では、今後学問領域をこえた連携を行うことで、新たな養殖技術の開発を行っていきます。

ヒラメ・ブリなど18魚種の 人工ふ化・種苗生産を 実現

当研究所では、1965年に世界で初めてヒラメの人工ふ化による種苗生産を実現。そして今日までに18魚種の種苗生産(世界初)に成功しています。この成果により、天然魚の乱獲による水産資源の枯渇を防ぐとともに、希少種の大量生産が可能となったことで安価な高級魚の流通が実現しました。

養殖漁業から、育てる漁業へ。将来予測される食糧難に備え「海を耕し、資源を求めろ」という未来へのビジョンは確かな成果として、実を結んでいます。

近畿大学水産研究所の主な成果・実績

- 1950年 第一養殖場の使用を開始
- 1954年 「網いけす(小網)式養殖」の研究に着手
- 1970年 水産庁の委託を受け、マグロ養殖の研究を開始
- 1975年 「インダイとイシガキダイの網籠の養殖法」で特許認可
- 1979年 世界初クロマグロの人工ふ化・種苗生産に成功
- 1980年 「ブリとヒラマサの網籠の養殖法」で特許認可
- 1995年 人工ふ化クロマグロの世界初放流
- 2002年 クロマグロの完全養殖に成功
- 2004年 完全養殖クロマグロを初出荷
- 2007年 人工ふ化クロマグロ第3世代誕生



近畿大学が世界で初めて人工ふ化から種苗生産に成功した魚種

年	魚種
1965	ヒラメ
1967	ヘダイ・インダイ
1968	ブリ
1969	カンパチ
1970	イシガキダイ・キハダ
1972	ヒラマサ・マルソウダ・ヒラソウダ
1973	ハガツオ・イサキ・シマアジ
1975	シロギス
1979	クロマグロ
1980	
1988	クエ
1990	マイワシ
1991	
1999	マサバ
2000	

養殖
Aquaculture
研究

